2026.10.30 上毛新聞

点描ぐんま経済

日銀支店長 見聞録

■154■

群馬の山々

心のタイムマシン

「記憶をたとへてみれば　記憶は雪のふるやうなもので　しづかに生活の過去につもるうれしさ」

萩原朔太郎による詩のこの一節、北海道旭川市出身の私には胸に響くものがある。ありありと思い出せる光景は多くはないが、しんしんと降る雪は数少ない中の一つ。まさに、雪と同じく記憶も気づかないうち降り積もる。

当地で過ごす中、朝夕に山々を眺め、安堵を覚える自分に気が付いた。何がそうさせるのか、はじめは見当もつかなかったけれど、ふと故郷の風景を思い出した。旭川は上川盆地に位置し、四方を山々に囲まれる。記憶の糸を手繰ると、友人の家に遊びに行く途中など、遠くを見やれば山々が連なっていた。年少の自分の中に、山々に抱かれる感覚が記憶として降り積もっていたのだろう。

ただ、大学進学以来、30年近く、山々を日常で感じることはなく、そうした記憶は日々の喧騒に埋もれてしまっていたようだ。群馬の山々が、故郷の懐かしい風景を久方ぶりに意識に浮かび上がらせてくれた。

当地で生活してから、こうした経験を何度か繰り返すうち、記憶のメカニズムに興味が湧いた。記憶研究の第一人者による「人はなぜ記憶するのか」（チャラン・ランガナス著）を読むと、自分の経験と似通ったエピソードが語られていた。インド生まれの著者は、人生のほぼすべてを米国で過ごしてきたが、子供の頃には数年に一度、インドを訪れ、特別な体験を幾つもしたと言う。その記憶は、米国に戻る度薄れてしまい、永遠に手が届かないように思えたが、インドを再訪し、現地のさまざまな音や色、匂いに囲まれると再び鮮やかによみがえるとも語る。

これは、人間には大きく異なる2種類の記憶があるからしい。一つは、「意味記憶」と言い、事実や知識に関するもので、どこで記憶したかは関係がないが、もう一つの「エピソード記憶」は、過去の出来事に関するもので、それを思い出すには心の中でその場所と時間に戻る必要があるとされている。この時間旅行は、光景や音、匂いだけでなく、味や音楽、感情もきっかけになるようだ。私には群馬の山々がタイムマシンなのだろう。

記憶は経済学の最先端の領域でもある。米国を対象にした分析では、世代によって物価上昇率に関する予想や資産運用に対する姿勢が異なると示されており、これにはどのような環境で時を過ごしてきたかが影響するようだ。

日銀マンとしては、情勢変化により、皆さんの記憶の中のどのようなエピソードが照らし出されるか、それが実際の行動にどう影響するかについて思いを巡らすことが欠かせないということだろう。



上野　陽一（うえの・よういち）　1979年生まれ。北海道出身。一橋大商学研究科修士課程修了。2003年日本銀行入行、名古屋支店営業課長などを経て、26年6月から現職。